

## 海軍ニュース：米海軍 P-8A 新型対潜哨戒機と海南島の中国海軍

漢和防務評論 20141201(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

今年 8 月、米海軍 P-8 が南シナ海で中国海軍戦闘機の迎撃を受けましたが、その際の中国軍機の行動が異常で極めて危険なものでした。2001 年に発生した J-8?戦闘機による P-3 への衝突事件は、未だ記憶に新しい事件です。問題は中国軍の指揮にあります。2001 年の事件では衝突して行方不明となったパイロットを中国は英雄に祭り上げ、地元の小学校に顕彰しました。当時中国上層部の説明は、国際常識をはるかに逸脱したものでした。KDR は、今回の事件で米海軍はカールビンソンをアジアに派遣したと述べています。

KDR 香港特電：

2014 年 8 月、米海軍 P-8A 新型対潜哨戒機が南シナ海で海南島の中国海軍航空兵第 8 師団（加萊基地）所属 J-11BH 戦闘機の迎撃を受けたが、その最小接近距離はわずか 7 メートル（米軍の公表による）という異例の事件が発生した。米中の軍事的緊張は、かつての P-3 に対する衝突事件（中国軍パイロット王偉）以来である。事件は、海南島の南 220 KM（118 海里）の公海上で起きた。事件の過程を分析した結果、中国は、すでに事実上南シナ海に防空識別圏（ADIZ）を設定したものと KDR は考えている。ただそれを公表しないだけである。KDR が理解している実際の状況は次の通り：防空識別圏の設定が提議されたのは、パイロット王偉の衝突事件をきっかけとする。本来は、東シナ海と南シナ海に同時に設定する計画であった。その後、東シナ海で試行したところ、国際的な反発を受けたので、南シナ海への設定を遅らせたということである。しかし南シナ海に防空識別圏を設定しないということではない。なぜ KDR がこのような推測を行ったのか？その理由は、迎撃を受けた地点が中国の 200 海里専属経済区の境界上であったからである。当初、防空識別圏の範囲を設定する線引きの基本的考え方は、200 海里専属経済区を基準線として、争いのある海域と争いのない海域の中間線を基準としていた。したがって、中国は、南シナ海に防空識別圏を設定はしたが、国際的反発を避けるために、特に東南アジア諸国の反発を避けるために、暫時公表を控えただけである可能性が極めて高い。今年 APEC の主催国であり、中国は対決色を避けたかった。KDR が特に関心を持っていることは：中国は、2015 年に、南

シナ海への防空識別圏設定を宣言するかどうか？である。特に米軍が海南島に対して頻繁に偵察活動を行っているからである。

今回の迎撃事件によって次のことが分かった：中国は、米軍偵察機が中国の 200 海里経済専属区上空に進入してほしくないこと。この区域内では米軍 P-8A 哨戒機の各種偵察システムが有効に運用できること、である。

P-8A が海南島の東南 220 KM の南シナ海に出現したということは、米海軍が中国海軍の 094 型 SSBN、093 型 SSN 戦略核潜水艦の配備、訓練状況に極めて関心があることを示している。今後も P-8 はこの海域に頻繁に出現するであろう。海南島は、すでに中国海軍の重要根拠地になった。ここには、最先端の SSBN、SSN 及び新時代の J-11BH（多用途戦闘機）、JH-7A（戦闘爆撃機）が配備されている。同時に、海南島は 2 艘目の中国海軍空母の基地になるはずであり、南海艦隊の主力水上艦、およそ全ての 052C 型ミサイル駆逐艦、071 型ドック型揚陸艦がここに配備されている。新たに HQ-12 型地对空ミサイル陣地も建設された。

2013 年 11 月の海南島核潜水艦基地の衛星写真を見ると、2 艘の 093 型 SSN と 1 艘の SSBN が配備されている。これらの潜水艦の配備だけでも米国の国家安全保障に直接関係する。P-8 が偵察に来るのも当然と言える。

今回の戦闘機の迎撃活動では出動した部隊に注目すべきである。迎撃地点に最も近い飛行場は、王偉が所属していた第 9 師団が所在する陵水飛行場である。しかし今回、加菜基地の J-11BH 戦闘機が迎撃した。J-11BH は PL-12 を 2 発、PL-8 を 2 発、合計 4 発の空対空ミサイルを搭載して P-8 を追尾した。2012 年 12 月まで、陵水基地には依然として 15 機の J-8II 型戦闘機が配備されていた。これが今回最先進型の J-11BH が出撃した理由である可能性がある。J-11BH は、J-8II に比べ滞空時間が長く、P-8 を長時間追尾できる。海南島加菜基地には、24 機の J-11 系列の戦闘機が配備されている。同基地と迎撃地点間の距離は 380 KM はある。この点は更に分析する必要がある。

P-8 の位置から遠距離基地に所在する J-11BH を迎撃に向けるためには、速い反応速度が必要である。そうでないと P-8 は離れて行ってしまふ可能性があるからだ。KDR の推論は：P-8 が南シナ海の当該空域に進入する前に、すでに地上レーダー或いは、海軍の早期警戒機 KJ-200 によって探知され、戦術データリンクによって J-11BH に発進が下令されたというものだ。P-8A は何処から来たか？ペンタゴンは公表していないが、P-8A は、2013 年 12 月に沖縄嘉手納基地に配備が開始されたので、今回は沖縄から離陸したはずである。このことは、米軍と日本軍の監視の重点が東シナ海や南シナ海に限定されず、海南島も重要な偵察地区であることが明らかになった。P-8A は、離陸して間もなく、中国の海岸レーダーに探知されていた可能性が高い。このことは、東シナ海聯合作戦

指揮センターの指揮管制系統が南海艦隊に P-8A の動向を通報したことを意味する。

迎撃した J-11BH の 24 号機は、J-11B の海軍型であり、ロシアが問題視したタイプの機体である。ロシアは、同機のコピー生産に対し、協定違反であるとしている。J-11BH のエンジンは、最大推力 12800 KG の国産 WS-10A ファンエンジン 2 基に換装されている。ペンタゴンが公表した動画によると、J-11BH は速い速度で P-8A の前方約 10 M 前後を 90 度左旋回し、更に反転姿勢を採って P-8 搭乗員に翼下の搭載武器が見えるような動作をしている。”極めて危険な動作”であるとペンタゴンの報道官は述べた。J-11BH の加速度は P-8A に比べれば大きいので、このような動作が採れたのであろう。

米国の情報部門の人々は KDR に対し:中国人はパイロット個人の”非礼な行動”であると述べている、と述べた。しかし KDR は、そうは思わない。中国人にとって、米軍機を追尾することは、高度に複雑な政治任務である。中国空軍パイロットは旧ソ連の生徒である。個人の自主性発揮の余地は極めて小さい。如何なる方式で迎撃するか?如何に迎撃するか?これらの問題は、中国の地上指揮官、早期警戒機の指揮官が詳細に計画し、準備して行ったものだ。もし再び類似の追尾事件が発生し、2001 年のように衝突し、米軍に死者が出たような場合、米側は如何に反応するか?こうなることは間違いない。すなわち、理由を問わず米軍は報復するであろう。特に衝突事件が公海上で発生したならば、米軍は国際法上で有利になる。如何に報復するか?今回の追尾事件後、米軍は直ちに空母カールビンソン号をアジアに派遣した。日本にはすでに空母ジョージワシントン号の空母戦闘群が存在する。今後しばらく、P-8A は米海軍戦闘機の護衛を受けて中国を監視する可能性を否定できない。20 世紀冷戦時代に発生した事案を逐一見て行くと、攻撃を受けて米軍軍人が死傷した事件では、米軍は必ず戦闘で報復している。例外は無い。

以上